©Makoto Kamiya

第214回定期演奏会　アメリカのロマン主義

2025年11月8日（土）　13：45開場　14：30開演〔14：10～指揮者プレトーク〕
指揮/角田鋼亮(音楽監督)　ピアノ/ニコライ・クズネツォフ*
ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番ニ短調Op.30*
バーバー：弦楽のためのアダージョOp.11
ハンソン：交響曲第2番Op.30「ロマンティック」

オーケストラから更なる可能性を解き放つ素晴らしい指揮者・下野竜也さんをお迎えしている本日・・・・に続きまして、次回の定期演奏会には、我らが音楽監督・角田鋼亮さんの登場です。――今シーズンのセントラル愛知響定期演奏会は、年間通してのタイトルに《ロマンティック・セントラル》を掲げていますので、本日もテーマにふさわしく、ブルックナーの交響曲第4番《ロマンティック》をお楽しみいただいておりますが、次回の定期演奏会では、同じ愛称を持つアメリカの交響曲・・・・ハンソン作曲の交響曲第2番《ロマンティック》ほか、アメリカ合衆国にまつわる名作たちをお聴きいただきます。

ハンソン?知らないなぁ、と思われるかたもご安心を。美しい詩情あふれる（それこそロマンティックな!）メロディと、どこか映画音楽にも通じるような、華麗さとゴージャスさが巧みにブレンドされたサウンドが展開するこの交響曲は、20世紀アメリカでも屈指の成功作として、かの地ではずっと演奏され続けている人気のシンフォニーです。日本ではまだあまり聴かれませんけれど、この機会にぜひ!

あわせて、後半生をアメリカに過ごした巨匠・ラフマニノフの傑作、ピアノ協奏曲第3番や、タイトルを知らずとも曲を聴けばそれと分かる名作、バーバーの〈弦楽のためのアダージョ〉と、心ゆさぶる名旋律に溢れた時間をお届け致します。題して〈アメリカのロマン主義〉。次回の定期演奏会も必聴です。

【アメリカで大喝采を受けた世紀の名ピアニスト――ラフマニノフ】

アメリカ先住民の長い歴史に、ヨーロッパからの移民たちが加わってから、北米の音楽事情は一変しました。この〈新世界〉でも演奏会が盛んに開かれるようになり、アメリカ生まれの演奏家・作曲家も次々に生まれました。

その一方で、アメリカ音楽界では〈外来〉演奏家たち、特に華麗な超絶技巧を披露して喝采を浴びる〈ヨーロッパ出身のヴィルトゥオーゾ〉を特にもてはやす、ということが続いていました。数多くの名匠がアメリカで人気を博したなかで、ロシア出身の偉大なピアニストにして作曲家、セルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）の存在も大きいものでした。

ラフマニノフはロシア革命の混乱を避けて故国を離れ、（ときどきロシアへ帰国しながらも）活躍の場を西欧に移します。後半生は、ヨーロッパとアメリカを往還しながら人気ピアニストとしての多忙な生活に追われ、最後はカリフォルニア州ビバリーヒルズに邸宅をかまえ、故国に戻ることなく亡くなりました。

ラフマニノフが初めてアメリカの地を踏んだのは1909年のツアーでのこと。このとき、ラフマニノフが自身のピアノ独奏で披露するために作曲した傑作が、次回の定期演奏会でお聴きいただく、ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 Op.30（1909年作曲）なのです。

【圧倒的な超絶技巧の華麗と、濃厚なロシア的憂愁】

なにしろ作曲したご本人が世界的ピアニストとして活躍した人ですから、自身で弾くために書いたピアノ協奏曲が、途方もない超絶技巧に溢れた演奏至難の作品なのは当然でしょう。その甘やかで濃厚なロマンと、溢れかえるようなロシア的詩情、そして圧倒的なピアノ技巧の華麗、その抒情をさらに拡げてみせる豪奢なオーケストラ・・・・と、聴き手をたっぷり包み込む作品です。

ピアノ独奏にニコライ・クズネツォフさんをお迎えする次回定期、陰翳も深い色彩感がスケールも大きく広がるそのサウンドは、ぜひ生演奏で体感していただきたいと思いますし、セントラル愛知交響楽団では、続く次々回の第215回定期演奏会（2026年1月24日）でも、同じラフマニノフが晩年に書いた傑作〈交響的舞曲〉を演奏しますから、次回・次々回と続けてホールでお聴きいただくと、感銘もさらに広がろうかと思います。

曲が書かれた背景など、予習には（作品の詳細な紹介も含まれる）マックス・ハリソン／森松皓子訳『ラフマニノフ　生涯、作品、録音』［音楽之友社、2016年］のご一読をお勧めしたいと思います（ピアノ協奏曲第3番をアメリカ・ツアーで初演した折、当時アメリカでも指揮者として活躍していた大作曲家マーラーの指揮で演奏した折のお話など、情報がみっちり詰め込まれた本です）。

また、古いモノラル録音ですが、ラフマニノフ自身が弾いた録音も残されております。これがまた素晴らしい演奏なので、ご興味あるかたは予習がてらぜひ。

【哀切な、限りなく美しいメロディ――バーバー〈弦楽のためのアダージョ〉】

ラフマニノフ以前には、チェコの巨匠・ドヴォルザークが19世紀の末、アメリカ生まれの音楽家を育てるために新たに設立された音楽院に、院長として招かれてはるばる渡米しています。彼は数年の滞在中に、交響曲第9番《新世界より》などの人気作を作曲していますが、彼をはじめ、ヨーロッパの優れた音楽家たちも指導にあたった結果、アメリカ生まれの作曲家たちからも優れた才能が現れはじめ、20世紀に入ってから爆発的に開花しました。

次回定期では、その中でも美しいロマンを織り上げる保守派に属するふたりの作曲家、バーバーとハンソンの作品をお楽しみいただきます。

まず、サミュエル・バーバー（1910～1981）の代表作を。数多くの優れた歌曲に本領を発揮したほか、オペラや合唱曲、そして交響曲や協奏曲、バレエ音楽・・・・と、広いジャンルで活躍しました。19世紀音楽の伝統に基づきながら、しかし表現豊かで抒情溢れる音楽を紡いだ彼の作品でも最も有名なのが、次回お聴きいただく〈弦楽のためのアダージョ〉Op.11（1936年）です。

もともとは、青年時代の彼がイタリアはローマに留学していた頃に書いた、弦楽四重奏曲（1936年）の第2楽章から、弦楽アンサンブル用に編曲されたもの。原曲の四重奏曲も素晴らしいのでぜひお聴きいただくとして、こちらの編曲版が1938年に初演されると、その息長く哀切で美しいメロディと豊かな響きの陰翳深さとが、バーバーの名前を一躍世界的なものにしました（のちに合唱曲《アニュス・デイ》にも編曲され、こちらも絶品なので機会あらばぜひ）。

心を深く震わせるその音楽は、しばしば著名人の葬儀で演奏されたりするようになり、作曲家は「そういうために書いたのではないのだが・・・・」とぼやいていたそうですが、ぜひ次回定期では、先入観を一切抜きにして、弦楽が磨きぬく美の境地を味わい尽くしていただきたいと思います。

【アメリカが生んだ新たな詩情――ハンソン《ロマンティック》の魅力】

そして最後は、バーバー以上に保守派を貫いた作曲家、ハワード・ハンソン（1896～1981）の代表作を。彼もバーバーに先んじて賞を得てローマへ留学、そこでイタリアの作曲家レスピーギに管弦楽法を師事、その色彩的な書法を吸収しています（レスピーギはラフマニノフのピアノ曲《音の絵》を管弦楽版に編曲して有名ですが、優れたアレンジながらラフマニノフ自身のお気には召さなかった・・・・というのも面白い繋がりですね）。

アメリカへ帰国したハンソンは、若くしてイーストマン音楽学校の校長に任ぜられ、40年にわたって音楽教育を拡充してゆくなど大役を担いながら、指揮者としてアメリカの新しい作品の紹介に努め、作曲家としてもアメリカの〈新ロマン派〉を代表する存在として活躍しました。

グリーグやシベリウスなど、北欧の作曲家から影響を受けながらアメリカ的なロマンを開拓した初期作品のなかでも、次回定期でお聴きいただく交響曲第2番《ロマンティック》Op.30（1930年）は、最初にご紹介したように、初めて触れるかたにもその美しさがすっと入ってくるような、詩情深い人気作です。

ハンソン自身の指揮による録音も複数残されていますし、アメリカのオーケストラにとってはお馴染みの国民的なシンフォニー。冒頭楽章の耳にはっきりと残るリズムや旋律、しみじみとした郷愁にもすっきりと美しい視界が広がる緩徐楽章、そして若々しく輝くフィナーレの、卓抜な管弦楽法を満喫させてくれる昂揚感!・・・・と、吹奏楽界でも編曲で親しまれている人気シンフォニーですが、オリジナルは日本では演奏機会がまだ少ないので、ぜひ次回もこのホールでその実演をお楽しみください!

やま の たけひろ
山野雄大

Profile

ライター［音楽・舞踊評論］。『音楽の友』『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CD解説、オーケストラやバレエ公演の解説、朝日カルチャーセンター新宿教室での音楽講座、歌詞対訳など多数。